

『蜜濡れオークション～極道に落札されて～』

著：高月紅葉

ill：八千代ハル

「どうして、こんなことに……って顔してるな」

男が出て行くと、武隈の手が怜志のネクタイをほどいた。

「おまえみたいなタイプの間人は、あきらめが悪い。自分が借金まみれになった拳句に売られてきても、まだ、『自分はこんなことでは落ちない』と信じてる。もしくは『自分で選んだことだから平気』だ。まあ、どうでもいいけどな。……どうせ、最後はアンアン喘ぐんだ。学歴のある男は、自分の喘ぎ声も高尚だと思ってるよな？ 『こんなにすごい俺が、こんなに喘いでる』ってな、女よりもうるさい。決まって悦に入るしな」

「だから、何だ」

「気持ち悪い、って話だ」

武隈の手が、怜志の後頭部の髪を鷲掴みにする。無理に顔をあげさせられた。ワイシャツのボタンがひとつずつ外されていく。

怜志は睨みつけたまま、視線をはずさなかった。

「おまえはどうなんだ」

武隈の指が、鎖骨をなぞり、ワイシャツを開く。指の節で、身体の中心をなぞられた。おぞけが走り、怜志は身体を硬直させて耐える。

女性経験は人並みにある。官庁を辞めたとき、学生時代からの恋人と別れたが、その後もデートする相手には困らなかった。

「センセのために、身体を売る覚悟はできたのか？ わかってると思うけど、相手はおっさんばかりだ。この肌に、脂ぎった顔で頬ずりされて、ネバネバしたベロが体中を這い回る。考えただけで拷問だ。なあ？」

「黙れ……」

睨んだまま唸るように言うと、部屋を囲んでいたブラインドがするすると上がり、全面に鏡が現れた。

「悪趣味だ」

どこを見ても、そこに自分がいる。嫌悪で身体が震え、強く拳を握りしめた。

「もちろん、マジックミラーだ。あんたが、どんな顔で喘ぐのか、見定めてから値段がつけられる。中の声を聞かせるかどうかは、俺が決める。……けど、まずはいい声を出せるのか、試さないとな」

武隈の手のひらが、ぺったりと押し当てられる。

「やめ……」

胸筋を撫でられ、そのまま脇腹をくすぐられる。

「く……っ、ん」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>